

有村真鐵
オーラル・ヒストリー

Oral History Interview with
Arimura Shintetsu

有村真鐵オーラル・ヒストリー

Oral History Interview with Arimura Shintetsu

インタビュアー：染谷滋、辻瑞生、住友文彦

2012年12月5日 3

2013年1月9日 20

有村真鐵（ありむら・しんてつ 1929年～）

1929（昭和4）年、長崎県大村市に生まれる。東京の千住を経て1945年3月、東京大空襲後に桐生に移り住む。桐生中学（現・桐生高校）卒業。50年、桐生工業専門学校（現・群馬大学工学部）卒業。同校在学中に美術部に誘われ、前橋の春陽会群馬研究会に参加し、南城一夫や横堀角次郎の指導を受けた。その後、シベリア抑留から帰郷したオノサト・トシノブを知り、晩年まで交流した。1951年自由美術家協会展に出品。以後、80歳を区切りに2010年まで自由美術展に出品する。1975年第18回安井賞展に《箱》を出品。1985年自由美術展で平和賞を受賞。群馬県内では、1951年にオノサトが創立会員であったため第1回連盟展に出品。翌年は連盟展と群馬県展に出品するが、それ以降は県展に出品し、1986年第37回展で山崎記念特別賞を受賞、2003年には県展を運営する県美術会の会長も務めた。軍靴、箱、高校生シリーズと一貫して虚無感に対する現実社会へ問題提起する作品を制作している。

有村真鐵オーラル・ヒストリー 2012年12月5日

前橋市幸塚町、有村真鐵自宅にて

インタビュアー：染谷滋、辻瑞生、住友文彦

書き起こし：宮谷奈津子

辻：それでは、始めさせていただきます。時系列で生まれた時の頃から、だんだんと話を聞いて行きたいと思います。まず、有村先生がお生まれになったのは、昭和4年、長崎県の東彼杵郡（ひがしそのぎぐん）という所ですね。

有村：ええ。

辻：福重村の寿古郷（すこごう）という所ですか。

有村：ええ。寿古郷ですね。

辻：どんな所でしたか。その頃の記憶というのがありますか。

有村：その頃というのはね、大村湾に近く歩いて15分ぐらい、また、山にも近い所ですがね（笑）。なかなか良い所ですよ。そこは、母の実家なんですよ。父はね、早稲田に行っていて保護者だった姉のご主人が亡くなって、学費が出せなくなったのかな。それで早稲田の今で言うと、予科と言うのでしたっけ旧制は、大学の学部じゃなくて、その前の。要するに昔の高等学校ですよ、そこの電気科を出て、学費が出なくなったので、今の大村中学校（高等学校）そこへ数学の先生で赴任するんですよ。なんで、そこへ行ったかと言うと、鹿児島島の時の中学校の恩師が、今の教育委員会にあたるのですかね。そこの指導主事のような立場にあって、それで中学校の数学の先生として（父を）引っ張ってくれたらしい。それで何年勤めたのか、3年か、4年か。

染谷：お父さんは、そもそもどちらのご出身だったのですか。

有村：鹿児島です。ほとんど兄弟が姉を残して皆亡くなっているんですよ。両親はもちろん。姉1人だけだったんですね。姉のご主人が学費を出してくれていたんだけど、その方も亡くなって、早稲田を辞めて、その中学校の先生になったんですね。それで、先生になったのは良いけど、その頃は高等師範を出てないと、なかなか給料が上がっていかない、というところがあったらしいんですね。校長の裁量で給料が上がったり、下がったり。それで、先生をやっても駄目だ、と思っただけ。そこは何年いたんでしょうね、はっきり分からないのだけど、僕が生まれてすぐぐらいだから昭和5、6年には東京へ出ちゃったのかな。先生やっても駄目だ、他のことをしようと思って、東工大に行くつもりで東京へ行ったんですよ。数学の先生をやっていたので、あとは物理と英語か何かを勉強すれば何とかかなったのかな。昭和8年に東工大に入るのかな。父親がこれから勉強しよう、っていうのに金がそんなにあるわけない。だから、（有村の）お袋の実家に頼ったのでしょね。もう子供も2人、姉と私がいました。弟が生まれた時には東京の中野にいましたから、これは（弟誕生は）東工大に入る前の年ですね。行ったり来たりしながら、何とか東工大を出た、という感じかな。僕は小学校入るまでは、東彼杵郡福重村の寿古郷という所にいたわけですよ。小学校1年の夏休みに東京へ出てきたんだと思ったな。

辻：小学校1年生の夏ですね。

有村：夏ですね。東京千寿第二尋常小学校という所に入った。千住緑町にずっと、桐生に来るまではそこに住んでいました。

染谷：お姉さんと2人で住んでいた、と前に伺っていたのですが。

有村：それは、父がたまたま終戦の前の年に桐生の検査所長をやらないか、という話があった。戦争がまだ激しい頃、家族は大村（長崎県）に疎開させたんですよ。食糧事情もあるし。たまたまそういう時期に、終戦の前の年の19年に、あの頃繊維統制会って言ったんですかね、繊維統制会桐生検査所というのがあって、そこへ来たんですね。19年の暮れに長崎から疎開していたみんなを桐生に呼んで、その小曾根町に住み始めた。僕は中学校だったし、姉は専門学校に行っていたから2人は東京に残ったんですよ。

染谷：ご兄弟は。

有村：7人。

染谷：有村先生は何番目ですか。

有村：2番目で長男です。姉がいて、僕がいて、二男、あとはもう全部女性ですけども、兄弟7人。

染谷：お姉さんがいて、有村先生、その下が男の子、女性が4人で7人兄弟。
先ほどの話で、小学1年生の夏の時、東京の千住の緑町に来た時は、家族中で来たんですか。

有村：家族中ですね。父が大学を卒業してね、千住にあった大和毛織という会社に就職をしたんですよ。その社長が持っていた借家みたいな家があって、そこを借りていたんですね。それでたまたま千住に来たんです。僕は桐生に来るまで離れなかった。家族は長崎に行ったりしていたけど、そこから桐生に来た。

染谷：7人のお子さん育てるのは大変なような気がするのですが。

有村：大変ですよ。だけどその頃は普通だったでしょう（笑）。

辻：どんなお子さんだったのですか、有村先生は。

有村：まあ、普通の子でしょうね。そう出来る子ではなかったのだけど。（当時の学校では）不思議に出来る子を集めて勉強を教えるようなところがあってね。それで3人残って。あの頃は男女合併のクラスは1クラスあって、あとは男のクラスと女のクラス。たまたま僕がいたクラスの先生は、3人男の子を集めて、今で言うドリルを、残って勉強させたり。あとは、普通でした。絵は好きだったし。先生に褒められた記憶というのは、土瓶を描いた時に、土瓶の取っ手を外側にはみ出すように描いたら、「大きさが出ていて良い」と一遍褒められたような記憶があります。

染谷：それは何年生の時でした。

有村：6年生の時でした。そういうのはありましたが、特別に絵が上手かった、というのは無かった。ただ、皆と一緒に体操をするのが、僕はどうも好きでなくて、前の人が一斉に手を前に出したりしていると、反対の

ことをやったりするところがあって、順応性がないというか、へそ曲がり、というか。

染谷：妹や弟たちは、みな同じ千寿第二小学校だったのでしょうか。

有村：一番下の妹は桐生に来てから生まれました。あとは全部同じ。

染谷：それだけの兄弟のご長男というと、取りまとめ役をされていたわけですか。

有村：うーん、結局は子守だとか、何かすることが多かったのではないですかね。姉もいたけど、下の子の面倒を見る、ということはあったし。後になってからですよ、長男だから、ということで、やりたいことをやらせてもらえない、というのが出てくるのは。僕は、演劇と美術と一緒にやっていたから、本当は卒業する時に演劇の方に行こうかと思っただけだった。でも、親父に「河原乞食にだけはなるな」、と散々言われ、「お前が後は面倒を見るんだぞ」ということでしょう。長男というのはそういうことで、これはとても自由が利かないな、と思った（笑）。

染谷：話を戻して恐縮なんですが、小学校 1 年になるまでは長崎にいらっやって、その時の本当に小さい時の原風景というか、大村湾を見た記憶というのは、残っているものなんですか。

有村：前に川が流れていてね、その川が大村湾につながっていたんです。ちょうど家のところが曲がり角になるんです。よく洪水に遭ったらしい。僕が居た時には遭ってないのですが。とにかくきれいな川で鮎や手長海老がいたり。そういう所で遊んだ記憶がありますね。あの頃農家は牛ではなく、馬を飼っていて、周りが全部農家ですから、川に馬を洗いに来るんです。その裸馬に乗せてもらったり。爺さんが馬喰（ばくろ）をしていた。馬を買い付けて、売っていた。家の庭には去勢する場所があってね、櫓が組んであって、馬を入れて去勢するんですよ。去勢したあとのアレをまた皆で食べるんですよ。ほとんど生で食べたんじゃないかと思うんですよ。それがひとつのお祭りなんだろうね、1 年のうちに何回あるんだか覚えてないんだけど、とにかく大勢の人が集まって、それでそういうものを食べた記憶があって。

染谷：そういう所から東京に出てくる、というのは随分環境が変わったのでは。

有村：変わりましたね（笑）。

染谷：小学校の時の絵に関する記憶というと、その土瓶の絵ですか。

有村：うん、そうですね。

染谷：お父さんや弟に、特に絵が好きだった人は。

有村：弟は先生の所へ習いに通っていたんですよ。僕はそれはしなかったですけど。どういう訳か、その担任に言われてだか。担任の所へ絵を描きに行っていましたね。

染谷：先生は他の習い事をしてなかったのですか。

有村：他は何もしてないですね。その頃、男で習い事をするというのは、ほとんどないでしょ。ピアノがある家は 1 軒だけだったですから。

染谷：近くに。

有村：いや、1 クラスの中で。あいつの家の側まで行くと、ピアノの音が聞こえる、というんでね（笑）。

染谷：小学校は1 学年に何クラスもあったのですか。

有村：僕らの時は、男子が3 クラスで、女子が3 クラス。男女合併は1 クラスかな。

染谷：当時って、1 クラスの人数は多かったんですよね。

有村：50 人くらいいたんじゃないですか。

染谷：父親が桐生に行かれたのが終戦の前の年ですか。

有村：ええ。たしか、19 年ですよ。

染谷：その前に皆さん一緒に暮らしていた。ああ、疎開していた。

有村：疎開させていて、姉と父と僕は3 人で東京にいた。

染谷：母親がみんな子供を引き連れて戻っていたんですね。

有村：それで19 年に桐生に行ってから、僕ら2 人が残された。

染谷：東京での戦争の思い出とかありますか。

有村：小学6 年生の12 月に太平洋戦争が始まって、中学1 年の時、アメリカ艦載機が飛んできた。戦争の時は、中学2 年生で、疎開の手伝いで、今で言えば常磐線ですかね、北千住から松戸へ行く線が走っていますが、その道幅を拡げたんすよね、爆撃された時に備えて。

染谷：爆撃の火事に備えて。

有村：道幅を拡げるために家屋を壊したんですよね。2 年生になってからは、疎開作業の手伝いです。ほとんど学校へ行かないで。その沿線の所と、千住の遊郭があった所があるんですが、今ではあまり記憶してないが、その道も拡げた。

染谷：そういう風に、空襲に備えて、道を拡げるために家を立ち退かせていたわけですね。

有村：だと思う。僕らは、建具を外してどこか一か所に集めて、あとは専門家が柱に鋸を入れて引っ張って壊しちゃう。あとは運び出すみたいなの。

染谷：そうですか。

有村：そういう手伝いを2年生でさせられて、3年になってからは日立精機亀有工場という会社に、何とかテストというのを受けて、全部割り振りをして、「お前は旋盤」、「お前はフライス盤」、「お前はボール盤」という風に分けられたんですけども、そこからはずっと3交代で毎日作業ばかりですね。

染谷：中学校の名前を聞き忘れたんですけど。

有村：中学は、府立十一中学校。あれは、七中ぐらいまでが割合に古いのかな、その後の新しいのではないかな。僕らが行った十一中というのはね、1年に入った時に5年生がいるくらいの新しい学校じゃなかったか、僕らは、5回生くらいになるのかな。新しい方ですよ。今は江北高校になってます。今の綾瀬駅が一番近いですかね。僕らがいた時は、綾瀬駅がなかったから、東武線で行って、小菅駅、その次が五反野だったかな。小菅駅というのは小菅刑務所がある所ですよ。その小菅刑務所の脇を通過して学校へ通っていました。

染谷：結構遠かったのですか。

有村：いや、北千住の隣ですから。荒川を渡れば、もう小菅なんですよ。小菅の駅からは学校まで歩いて15分くらいはかかったのかなあ。あの煉瓦塀の所をずっと通っていたんですね。

染谷：そうすると、中学で授業らしい授業というのは、してないんですか。

有村：2年の途中までやってすぐ疎開作業、その後授業をやって、3年になってからは無いんじゃないですか。桐生に来た時は4年になって終戦になってからですが、数学なんかは、東京で1年の時と2年の途中からやっただけなのに、ずっと先へ進んでいましたね。

染谷：(笑)、もう、やったことになっていた、ということですか。

有村：いやいや、東京の方が進んでいた。

染谷：あ、東京の方が進んでいたんですか。

有村：「対数計算なんか、まだやってねえんか」っていうくらい。向こうの方が。その頃は、軍関係の学校に何人入れるか、というのがひとつの目標だったんですかね、府立というのは。

染谷：割に、しっかりと教えていたんですね。

有村：それはもう厳しかったですね。それに、しょっちゅう軍関係に行った卒業生が講演に来たりね。この学校は良い所がある、と。何で良い所があるかと言うと、毎月10キロマラソン、というのがあったんですよ。それから年に1回40キロマラソンというのがある。

染谷：えー、フルマラソンですね(笑)。

有村：40キロマラソンというのはですね、千住からね、草加、粕壁を通過して、大宮の氷川神社まで歩いたり走ったりして行くんですよ、それが40キロ。

染谷：は一。

有村：「そういう鍛え方をしたから、俺たちは学校へ行っても楽です」という風なことを言うものだから、ますますそれが激しく、エスカレートしていった（笑）。だから、学校へ行ったのは本当に少なかったけれどもマラソンなんかはやっていた1年の時、2年の途中から疎開作業、それが夏休み前に終わって、2学期から3年になるまでは学校に行っていましたね。3年になってからは、日立精機亀有工場に勤めた従業員ですよ。

染谷：絵を描いた記憶は、東京の中学時代には無いのですか。

有村：東京の中学ではね、絵はもちろん描いたことあるんですけど、美術の先生で長谷川先生という人がいたんですよ。その先生が背が高く、ボソーとした先生でした。朝礼に出てくる時、先生がみんな履いているゲートルを、その先生だけ巻いてないんですよ。不思議な先生だな、と思っていた。ある日授業の時、「僕は、多摩川が近くて、魚釣りをよくするんだけど、餌を撒くための袋が欲しいと思っている。袋で一番良いのは、豆腐を作る時の袋が一番良いんだって（笑）。誰か、豆腐屋のその袋をもらってきてくれないか」と言った。たまたま、小学校の友達に豆腐屋の俵がいて、2つぐらいもらってきたのかな。それをその先生に持って行ったら、さっそく先生が梨なんかを持って来てくれて。その先生と親しくなったんですよ（笑）。その先生を知ったから絵を描くとか何とか、ということは無かったんだけど。ただ、授業の時はよく面倒は見てくれましたね。「ここは、もっとこうだろ、ああだろう」なんてことは助言してくれたりしましたけど。その先生が不思議な存在として映った、というのが僕にはまずひとつ印象として強くある。

当時、学校から帰る時、何人か集まると上級生が「歩調とれ」と号令をかけ、校門を出るんですが、マラソン大会の後などは脚があがらないんです。そういう時に軍事教官がいて、「なんだ！」と。全員平手打ちで。そういう時代ですよ、そういう時代に美術の先生がゲートルも履かないでそこに居る、というのが何とも不思議な存在でした。相当抵抗したのだと思いますよ。まあ、ああいう風には普通の人は出来ないだろうな、と。だから、美術の先生って凄いなって、その時思ったけど。それが美術を自分でやるようになるとは思わなかった。やるようになってから、その先生の存在をまた改めて再確認しました。

染谷：東京大空襲の話をちょっと聞かせて下さい。

有村：東京大空襲の前後は毎日のように空襲があったんですけども、ほとんど着の身着のまま寝ていたようなもので、空襲警報が鳴ればすぐ、枕元の鉄兜と手荷物を持って、パッと外に出ていく、という感じだった。とにかく、3月10日はすごく広範囲に渡っての空襲だった。まったく、空が赤く見えるくらい。焼夷弾が落ちてくる時、付いている青い麻の紐が燃えながら落ちてくるんですね。それが、きれいだ、というのはアレなんですけど、きれいな感じで落ちてくるんです。姉はその時は工場に行っていたのかな、東京大空襲の時は、僕は1人だった。家が割合広かったので、夫婦と子供2人の4人家族に一部貸してたんなんですけど、小母さんが醤油瓶などの生活用品を出してきて「これを持って逃げて行ってくれ」と手伝わされて、そういうものを持って京成電車の西千住と千住大橋というのがあるんですけど、その広いグラウンドになっている所へみんな逃げた。戦時中のバケツリレーなんてものじゃ役に立ちませんよ（笑）。毎日のように訓練させられて。バケツ持って運んで、梯子登って、ジャーなんて。あんなことなんて出来ないですね。もうどんどん焼夷弾降って来るし。みんな逃げるだけでしょ。みんなそのグラウンドに逃げて、家族同士であっちこっちにたむろしているんですけど。幸いにその時は僕の家は焼けなかった。前と西の方は燃えたが、割とそこ一角だけ取り残された感じで。隣の家にも僕の家にも（焼夷弾が）落ちたんですが、火災にまでならなかった。隣の家には隅に落ちて、畳の下から燃えている感じですよ。それなんかは、畳剥いで、すぐ水掛けて（火が）止まったんですね。（住んでいた）家に落ちたのは、焼夷弾の油が襖に跳んだが、（火は）消えました。家の方は大丈夫だったんですね。とにかく逃げることで精一杯という感じでした。もう、消火活動というのは、自分の家と隣の家だけだったですね。もう朝見たら、顔中ススだらけで、真っ黒け。酷いもんだったけど、よく命永らえて、という感じです。

それで、その後動員されていた工場へ行ったら、「深川の連中はみんな死んだ」とか、同級生も亡くなりましたね。みんな隅田川に飛び込むが、兩岸から炎が来るから水の中にも熱いんですね。沈んで、上がってくると、火があるからまた戻る、そのうち疲れちゃってみんな亡くなったのかな、と思う。

染谷：先生のお住まいだった千住は、割と被害は少なかった。

有村：割と、少なかった。(東京大空襲の)3月10日には、でも結局は焼けちゃった。それを経験したものだから、桐生のみんなの所へ行こう、いつ死ぬか分からない、と思っちゃった。動員先の工場は、軍の管理の下に置かれているから、軍需品を生産している。亀有は軍需工場地帯で全部狙われているんです。(工場には)焼夷弾ではなく、爆弾が落ちるんです。空襲が来ると、防空壕に入るのだが、工場の変な機械の油が染み出て、それが、ろうそくの火に照らされて暖められて嫌な臭いがするんです。その中で、シュシュシュ、と爆弾が落ちてくる音を聞きながら、じっと待つというのは、自分で相手を倒すっていう方がいい、とその時は思いましたね。じっと(相手)が通りすぎるのを待っているような感じ、っていうのが、あれが辛かったですね。いつ死ぬか、という感じだったから、それでとうとう逃げ出した感じかな。その後、3月23日に桐生に来たんですよ。

染谷：(桐生行きは)誰かに言われてですか。自分で判断したのですか。

有村：親父なんかからは、「まあ、こっちに帰って来いや」って、何回も言われていたんだが、友達もいるし、東京でみんな頑張っているんだし、何とか俺も残りたい、という風に思っていたんだけどね。あまりにも(空襲だの)そういうことが迫ってくると、居たたまれなくなってきたのかな。

染谷：桐生へはお1人で(帰ってきたのですか)。

有村：ええ、その時は。姉はその後帰ってきました。東武線で新桐生まで帰ってたんですが、その間何回も空襲で止まりました。ちょうど、中島製作所に通っている人たちが帰る頃の時間帯だったのかな。僕は、初めての桐生で、住所だけ書かれた紙っぺらを持っていて、降りてから、そういう人たちに聞いて、探して、家族のいる所へ行っただけです。相当ありましたよ、新桐生から。今の太田美術館の側で、小曾根町という所ですから。その頃バスなんか走っていたのか、それが分からないんですけど。

染谷：その頃、お父さんは他のお子さんとは一緒だったのですか。1人ですか。

有村：家族はみんな一緒ですよ。桐生へ赴任して暫くは1人で居たんですけど、その後家族を呼びましたからね。

染谷：大村から、皆さん桐生に来ているわけですね。

有村：たしか、(家族は)19年の暮れには(桐生へ)帰っている。僕は、20年の3月に桐生へ行っただけだから。3カ月か4カ月早く家族は桐生に来ていますね。

染谷：ご家族の方は、長崎に居なくて幸いした。

有村：良かったですよ。けど、大村だから長崎の町とは離れていましたからね。けど、お袋の兄弟、家族は原爆手帳を持っていますよ。それは、長崎で被爆した人たちを大村病院という陸軍病院で看病していたから。看護婦さんを手伝ったのでしょ。二次被爆です。

染谷：それで、昭和20年3月には家族がみんな桐生に集まったということですね。で、桐生で終戦を迎えられる。

有村：桐生に行った時は、古河製作所という飛行機の窓枠とか、操縦桿みたいなものを作る鋳物工場に動員された。だけど、もう飛行機を作る力が無かったんですね。前から動員されていて、僕が行ったのは4月ですけど、2カ月位でもういい、と言われた。今度は、広沢にある大日本機械へ行った。そこでは高射砲の弾を作っていた。僕ら1クラスは拳銃を作っていた（笑）。拳銃と言っても我々が作る拳銃だから、そんな大それたものではなくて、銃身があってね、持つ所、取っ手があって、引き金があって、猟銃の弾のようなものを詰め込んで、引き金を引くと、1発は撃てるんだけど、2発は撃てないかもしれない、というぐらいの。今見たって、まったく玩具みたいなもの。何だと思った、初め見た時は。特攻隊の自殺用のピストルだと言っていましたね。

一同：（ため息）

住友：1発で良いと。

染谷：なるほどね。

有村：だから、もう分かっている人には、そういう様子を見れば、今の日本はどうなっているのか、戦線がどうなっているのか、分かっていたのだろうと思うんだけど。我々はまだそこまでは。夢中で与えられた仕事をやっていた。それ以降作る仕事が随分無くなった。拳銃を作る仕事も無くなってきました。

染谷：前にお話を伺った時に、桐生に来たら、空襲がほとんど無くて、と。

有村：本当に無かった。大日本機械のある広沢で空襲に遭うと、山の中に逃げて行くのだが、（空襲が）本当に少なかったですよ。飛行機の姿を見たことが無かった。桐生は駅前で飛行機からの機銃掃射で1人か2人亡くなっている、それだけでしょうね。まあ、偵察機みたいなのが来て通りがかりの人を撃ったんでしょうけど。なんで桐生がやられなかったのか、よく分からないですね。みんなやられているでしょ、高崎から前橋から、製作工場のたくさんあった伊勢崎はもちろん。桐生はあの頃、軍需工場はなかったんですかね。

染谷：太田は、ねえ（空襲が多かった）。

有村：太田はもちろん集中的にやられた。桐生は本当に燃えてないんですよ。

染谷：終戦の日の記憶、ちょっとお話し頂ければ。

有村：重大発表があるから、12時に食堂に集まれ、と言われたのかな。それでお昼に行って、大きな食堂の中に、そんなに大きくないラジオが置いてあって、そこで声が流れてくるんだけど、何を言ってるんだかさっぱり分からなかったなあ。放送をしている間は、重々しいというか、天皇の音が漏れ聞こえてくる。その後で、「日本は負けたんだ」と先生が言ったのか、工場で言われたのか、その辺もよく覚えてない。でも、とにかく食堂から出てきた時は、戦争が終わったんだ……というより、日本が負けたんだということの方が、みんなには（印象が）強かったのかな。その後は、学校へ帰っても、どうして良いのか分からない、本当に背骨が無くなっちゃったような。その後が酷かったですけどね。先生に、何を俺たちに教えたんだ、という感じで。随分先生も参ったでしょうね。

染谷：学生が詰め寄るということがあったのですか。

有村：ええ、そういうことがありましたね。

辻：桐生では、どちらの学校に行かれていましたか。

有村：桐中（註：旧制桐生中学校）です。前中（註：旧制前橋中学校）へという話があったんですけど、桐生からだと通わないといけませんからね。それに、ああいう時は受け入れるのか、そういうのもよく分からなかったから。

染谷：桐中の3年生に入った、ということですか。

有村：5年制ですからね。3年が終わっていた。だから4年生に編入になった。4年5年と桐中です。

住友：ご親戚や親しい知人で戦争に行かれた方、というのは。

有村：うちの母の方は、弟が満州国陸軍中佐で、獣医をやっていて。なんで満州に行ったのか、それは分からない。こっちで獣医をやっているよりは、満州でやった方が良かったのか、言われたのか。その人がいるぐらいで。父の方は、親戚が皆、士官学校だのを出た人たちが多くて、ほとんど軍関係ですよ。子供たちのどこまでが亡くなったのか、はっきり分からない。父の方は、本当に近い親戚というのが亡くなっていたから、子供の頃何回か行った家があるけども、皆軍関係です。鹿児島というのはそういう所ですね。ちょっと良いと、裁判官。あとは、軍関係、お巡りさんとか、そういう感じですよ。官吏みたいな人が多いです。あそこは、あまり産業が無いんですよ、鹿児島はね。かつおぶしと、あとは焼酎と（笑）。

住友：戦争が終わってから戦争時の話を聞かれたりすること、っていうのはあったんですか。

有村：鹿児島の方からは、全然そういう話は聞かなかったですね。

住友：交流が無くなっちゃった。

有村：話す相手が、僕らはなくなっちゃった。父が亡くなるのが早く、詳しいことを聞けなかった。親父は、（亡くなったのは）58の歳だったから。

染谷：何年ぐらいのことですか。

有村：親父の亡くなった年度、忘れちゃうなあ。

染谷：お幾つくらい歳は違っていたのですか。

有村：28くらい違っていたかもしれない。

染谷：先生が28歳くらいの頃、というと昭和32年くらいのことですかね。

有村：あ、そうですね。

染谷：長崎に原爆、新型爆弾が落ちた、という話は桐生に伝わってはきましたか。

有村：新型爆弾だ、という話は伝わってきましたよね。それが、原子爆弾だ、という話はいつ発表になったんだか、ずっと遅いですよ。新型爆弾が広島に落ちて、長崎に落ちて、という話は伝わってきた。

染谷：長崎の郷里のことを心配した記憶っていうのはありますか。

有村：爆弾が落ちたのが長崎で、住んでいるのが大村だから、まあ、距離はあるから、という感じではい没法たねえ。

母親の方も。長崎の空港が出来る前に、大村飛行場っていうのがあったんです。海軍の飛行場。

染谷：では、戦前にあった、ということですか。

有村：戦前にあった。戦後になって大村飛行場は民間機が離着陸していた。だから、大村にも爆弾は相当落ちたんですよ。

染谷：佐世保が、むしろ近いですよ、大村だと。

有村：佐世保だって相当（距離が）ありますよ。佐世保は随分また、やられたんでしょうね、軍港でしょうからね。

染谷：はい、では、戦後の話に移らせて頂いて。桐中を卒業したのが何年になるのでしょうかね。

有村：桐生工専に入ったのが23年ですから、23年の3月ですね。

染谷：その時そこで演劇部に入られる。

有村：近くにいた友達の兄貴が桐生工専（註：桐生工業専門学校。現在の群馬大学工学部）の演劇部に關係していて、盛んに勧めるものだから、別に運動はやってなかったので、じゃあ、演劇部で舞台装置を作る裏方なら良いよ、という感じで入部した。だけど、裏方をやりながら、俳優がないから、と随分引っ張り出されて舞台の上には、よくあがりましたね。

染谷：大道具も合わせてやっていたんですか。

有村：大道具もやりました。

染谷：美術の方と、接触するのはどういうきっかけですか。

有村：美術部と演劇部の部室が隣り合わせで、美術部の部長を森村惟一（1926-）という人がやっていた。この人は、一家を支えているような人だった。

染谷：学年は同じですか。

有村：僕が入った時に3年生。

染谷：2つ上なんですね。

有村：あの頃、伊勢崎で絵具屋を始めたんですね。創美社という。伊勢崎の人だったんですね。器用な人でね、絵も上手かったですよ。その人が卒業する時に、「美術部の部員がいないんだ、俺が卒業すると美術部が無くなっちゃうから、何とか引き継いでやってくれないか」と言われ、僕は人が良いんですね（笑）。引き受けちゃったんです。

染谷：演劇部もやりながら。

有村：やりながら、美術部も引き受けて。もう、予算も付いている、というんですよ。とにかく、美術部を残していく、というので、部長をやって、部員を集め、絵も描き始めるわけですよ。演劇は（発表が）1年に1回でそんなにいつも忙しいわけではない。演劇を公演するぞと決まってから、舞台装置作ったり、脚本を覚えたりしなければならぬけれど。やっぱり一番困るのは、全然絵を描いてなかったから。美術部のパンフレットの表紙を描いてもらったり、舞台装置の案を考えてもらったり、そういう人がたまたま近所に、美校（東京美術学校）を出た笠木実（1920-）という人がいた。まだ卒業したばかりだったかな。その笠木さんが、家の側にアトリエを作ったんですよ。

染谷：小曾根町ですか。

有村：小曾根町から、その時当時の東堤町（註：現在の堤町）へ移転した。小曾根町は大きな機屋さんに部屋を借りていたから、一軒家に移りたい、というので。笠木さんが西堤町にアトリエを作って、近かったので、「絵を見てくれないか」と頼んで、笠木さんの家に通ったりしました。それで水彩なんか描いてましたが、「水彩なんか描いていたら、あんた駄目だよ。油絵を描きなさい」と言われて、油絵を始め、森村さんの創美社まで絵具を買いに行った。

染谷：伊勢崎まで絵具を買いに行くんですか。

有村：そう。それで、油絵を描き始め、2年になってから美術部を受け継いだようなもので。森村さんは、卒業されて、伊女（伊勢崎女子高等学校）の先生になったのかな。あの人、なかなかそういう点では、堅実ですね。南城（一夫 1900-1986）さんと、どこでどう知り合ったのか、森村さんが春陽会の研究所をやろう、っていう話になって、前橋の黒田サチ（1890-1971）さんという人が経営していた幼稚園、清心幼稚園を借りて、月に1度、春陽会研究所って言ったかな、研究会だったかな、そこで始めたんですね。桐生から、笠木実、オノサト・トシノブ（1912-1986）さんの奥さんの智子さんと、僕と、桜井幸子っていう、この人もまだ絵を描いてますがね。それと、今の無隣館に昔、桐生文化学院があり、そこの事務職をやっていた田島康男さんって人も、前橋までひと月に1回通ったんですよ。

染谷：当時電車は走っていたんですか。

有村：電車は走っていました。上電（上毛電気鉄道）で通っていました。要するに、ひと月に描いた絵を持って、研究会に行って見てもらって、ということです。

染谷：それはいつ頃ですか。

有村：桐生工専にいた時代です。2年生の時。

染谷：2年生の時に、春陽会。では、森村さんは卒業してすぐに、そういうことを始めていたんですね。

有村：始めてくれたんで、これ幸いと、前橋まで行った。多分、(ひと月に1回の日)は)日曜日だと思う。南城一夫と、川隅路之助(1906-1993)、横堀角次郎(1897-1978)、この3人が会員だったのでしょう。あと、随分若い連中から年配の人が集まっていましたね。前橋の人が多かったと思いますね。

染谷：どんな方がいらっしゃいましたか。永井(金四郎 1931-)さんは来てましたか。

有村：あの人と是一緒にならなかったですね。手塚(宏一 1928-)という人がいました。

染谷：手塚宏一さん。岩崎義治(1921-2010)さんなんかは。

有村：岩崎義治さんは、その時は全然無関係ですよ。あの人は、創元会ですよ。始めた頃は、あんまり僕も知っている人はいなかった。成田一方(1894-1973)や遠藤燦可(1911-1993)なんか来てましたよ。

染谷：(両氏とも)日本画家ですよ。

有村：日本画家です。また南城さんは人を褒めるのが上手くてね、(真似をしながら)「有村さん良いよ、なかなか良いよ」と。展覧会を1年に1回やって、自信賞をくれたりね、自信を持つように(笑)。

染谷：展覧会っていうのは、清心幼稚園でやるんですか。

有村：どこでやったのかな、清心幼稚園ではなかった気がするんです。どこかの会場を使って。そんなに大きな展覧会ではないけど。それで、そこへ2年は行ったのかな。それで、笠木実さんが南城さんの紹介で岡(鹿之助 1898-1978)さんの家へ行っちゃうじゃないですか。それと同時に僕らは通ってないですね。

染谷：笠木さんがリーダーシップをとっていたのですね。

有村：ええ。智子さんはオノサトさんと結婚して。

染谷：智子さんはオノサトさんと結婚する前の姓は。

有村：田口智子さん。オノサトさんとすぐ結婚しちゃうから、自然に2年で(前橋通いが)終わったのかな。オノサトさん、23年にはシベリアから帰ってくるから、もうその頃いたんですね。桐生美術協会(註：以下、美術協会)を作って、オノサトさんが初代会長なんだけども、それで行き来をするようになったんだと思う。どういう出会だったのかは、どうもあまり思い出せないのですよ。春陽会が嫌になったのは、ひとつは「春陽会に出せ、出せ」って川隅路之助さんがすごく言うのですよ。まだ絵を描き始めたばかりで分からないじゃないですか、春陽会がどういう会か、とか。ただ、「はい。はい」と言えない。また会うと言われるのかな、嫌だな、なんて思って行っていたものだから。だから、離れるきっかけも早かったのかもしれないけども。美術協会は、いろんな会が集まってできているわけですから、その時に一緒になったのだと思う、オノサトさんとは。

染谷：結局、美術協会が出来たのは、いつですか。25年の10月ですか。そうだとすると、先生は桐生工専を卒業した年ですね。

有村：そのくらいかな、いや、だけど学生の頃から行っていた気がするなあ。

染谷：オノサトさんの所へですか。

有村：オノサトさんの所もそうだけど、美術協会に関係していたのは、学生の頃からだったような。簗輪初太郎（1901-1986）さんという人がいて、オノサトさんと中心になって作ったから。その時はまだ、笠木さんもいましたね。それで、オノサトさんと知り合って、オノサトさんが、また貴公子ではないけど、良い顔をしているんですよ。

染谷：すごく格好良かったんですよ。

有村：日本では見ないような防寒服を着て、それがなかなか（格好良い）。見惚れてしまうような、白系ロシアの人のように見えたりした。それで、僕とも全く同じ目線で話をするんですよ、あの人は。つまり、僕を絵を描き始めた小僧、みたいなそういう見方を全然しないですね。例えば、瀧口修造（1903-1979）さんに、何でか紹介状をオノサトさんが書いてくれて、それを封筒に入れる前に僕に見せて、「こういう風に書いたんだけど、これで良いかね」と。それを見たらね、「僕の若い絵の友人の有村君を紹介します」と書き出しにあるんです。若い絵の友人、なんて書いてある、ビクッと、そういう見方にまず驚いた。桐生の宮地（佑治 1934）君も、自由美術の展覧会場に行ったら、オノサトさんが皆のいる所で、「僕の若い友人の絵描きの宮地君です」と紹介された。その時、宮地は僕より下の高校生。この前、宮地君とそういう話をしたんだけど。そういう人なんですよ、オノサトさんが。絵描きだからかな、って思ったけども、全く新しい人種に会ったような感じだったですね。それで、惚れ込んだ感じで、絵をずっと見てもらっていた。それでも、だんだんオノサトさんと考え方が離れていくようなところがあって、オノサトさんは「文学性みたいなものは絵の中に入れるものではない。絵画は絵画だ。文学性は否定しなくてはならない」と言っていて、僕は、文学性を背負い込んでいて、なかなか離したくないようなところがあって。それでもずっと、随分長い間見てもらいましたね。ただその中で、「とにかく有村君、描きたいものだけ描けば良いんだ、他の余計なものは描かなくて良いんだ」ということは徹底して言われたような気がする。だから、靴なら靴1足、みたいな、とにかく余計なものは描くな、と。僕に関係するようなパンフレットや資料をよく取っておいてくれて、行くとくれたりね、僕は全然オノサトさんの絵の方向とは違う方へ行くようになるんですけども、そういう点では非常に几帳面で、きちんと大事にしてくれましたね。

辻：具象的な絵を当時も有村先生は描かれていたのですか。

有村：オノサトさんの所にいた時は、あまり具象的ではないですよ。

染谷：抽象。構成画みたいな。

有村：具象的なものは、なかなか描けないでいた頃だから。余計抽象的なものに走っていたような所があり、やや抽象的な作品が多かった頃かな。オノサトさんの所に行っている頃は。それが、だんだん美術教育をやるようになってからかな、先生になってからだんだん変わっていくのかな。どっちにしたって描けなきゃ抽象画だって描けないのだけでも、はじめ何となくとっつきやすいところがありますよね。（抽象画には）とにかく戦後は自由で良いんだ、何を描いたって良いんだ、という風潮が強くて、大きな流れはほとんど抽象に流れて

行ったでしょう。オノサトさんの所にいたし、そういう流れがあったでしょう。

染谷：桐生工専の美術部で絵を描いていた時も、抽象画だったのですか。

有村：そうですね。

染谷：その頃、学生の美術連盟みたいなものを作られたのですか。

有村：それも森村さんですよ。初代委員長ですから。委員長の2代目が狩野守（1929-2004）さんですよ。その時、僕が副委員長をやった。3代目は誰だったのかな。狩野守と僕は同学年なんですね。

染谷：狩野さんは前橋の群大（群馬大学）、群馬師範ですよ。

有村：僕がこっち（桐生工専）でしょ。大学や専門学校関係が合併して。関東学園も入っていたかな。あとは高等学校も含めて（美術連盟を）作ったんですね。

染谷：それは年に1回くらい展覧会をやる、ということですか。どこで展覧会をやっていたのですか。

有村：これは前橋の……どこだったんだろう。桐生支部もあったんだろうけど、支部で（展覧会を）やることはなかった。

住友：その頃影響を受けた作家とか作品とか、見て心を動かされたものというのは、あったのですか。オノサトさんと会う前。

有村：オノサトさんに会う前というのは、ほとんど作品を見てないんですよ。森村さん、笠木さん、南城さん、横堀さん。見る機会もなかったでしょ、なかなか。今も記憶しているのは、石井壬子夫（1912-1990）さんの《倉庫》っていうのを、いつ見たのか、桐生の高島屋で見た時に「絵ってこういうんだ」と思った。しょっちゅう見ていたオノサトさんの絵以外にね。

住友：どういう作品だったのですか。

有村：すごく堂々としていて、良い絵なんですよ。

染谷：それは倉庫の建物を描かれたものですか。

有村：隅田川があってね、その向こうに倉庫があって、起重機かなんかあるやつですよ。桐生は行かれなかったんだっけ。大川（美術館）は。

住友：行きました。

有村：石井さんの作品は見ましたか。そこに展示されていた。（註：「石井壬子夫展」大川美術館、2012年10月5日-12月16日）

住友：ご覧になった作品が展示されていたんですか。

有村：大川美術館にその作品がある。その絵を初めて見た時に、絵ってというのはこういうんだ、と思った。

染谷：それはどういう会場で。個展か何かですか。

有村：グループ展みたいな感じで、美教の展覧会だったのでしょ。桐生の高島屋です。石井さんは個展はやってないと思いますね。

染谷：桐生にも高島屋があったんですか。

有村：あったんですよ。今ね、美喜仁っていう所にあったんですね。

住友：石内さんが好きだと言っていた。

有村：石内都さんか（笑）。

辻：名前が良い、って言ってましたね。

有村：美しく喜ぶ仁ってね。他にもあるよね。

辻：桐生高校の裏にもあります。

有村：（桐生市民）文化会館には何が入っているの。

辻：そうですね、あそこにも美喜仁が新しく入りました。

有村：大体、美喜仁は魚屋だったんだろ。あそこが魚屋で寿司屋を始めた。そしたら景気が良くなっちゃって、みんな買い取っちゃった。高島屋まで買ったのかな。だから、展覧会という、たしかあの時はね、桐生は高島屋じゃないかな。高島屋の2階にちょっとしたスペースがあったんですね。

染谷：織物会館などは使っていたのですか。

有村：ああ、使いました。井上肇と二人展した時は、織物会館だったかな。あとね、桐生倶楽部というのがあった。

染谷：ああ、今でもある。

有村：桐生倶楽部も使えた。（展覧会を）やりましたね。

染谷：当時まだ桐生には画材屋は出来てない。

有村：画材屋は、三俣（画材店）っていうのがあって、結構前から始めていたんだろな。相当前からですね。創美社へ僕が行ったのは、森村さんのお役に少しでも立てれば、というので、買いに行っていた。その頃、三俣はあったと思いますね。

創美社はその後、奈良書店の斜向かいくらいに作ったんですよ。森村さんは、女性の兄弟が多くて、桐生にお

店を作って、その妹さんが来てましたね。それが、でもやっぱり三俣には敵わなかったのかな。そんなに長くやっていない。

染谷：三俣には、ギャラリーはあったんですよ。

有村：あれはね、随分後で、反対側の空いた店を買い取って、ギャラリーにしたんですね。それは新しいですよ。古くからはなかったですね。

染谷：桐生で一番古そうな画材屋って言うと、やっぱり三俣。

有村：三俣ですね。今はツカサ（画材）だけかな、画材屋は。

辻：この頃は、就職されていて、お仕事はどのようなことをされていたのですか。

有村：卒業したのが、25年の3月で、4月からは吉田研究室という、色染科の研究室があって、1年間ずつというと思ったんです。染物を習おうと思って。そこへ2カ月くらい通った頃かな、館林の織物工場で、どうしても1人卒業生が欲しい、と。工場長と社長が上手くいかない。社長というのが、製粉会社から派遣された人で、織物工場は製粉会社が作ったもの。

染谷：日清製粉。

有村：大和屋精麦という会社。その会社が朝日織物っていう工場を作って、社長は織物のことを全然知らない。工場長と上手くいかないの、替わって工場をやってくれるような技術者が欲しい、という要望があり、面白いから行ってみないか、と言われた。

染谷：え、卒業したばかりなのに、工場任せちゃうのですか。

有村：任される、というか……。そういうことだから、面白いから行ってみよ、と周りの先生にそそのかされて、12月まで行った。行ってみて、たしかに嫌なところがありました。この織物を作るには、タテ糸と横糸がどのくらい掛かって、1メートル幾らくらいで出来るか、みたいなことをすぐ計算しろ、なんて、行った途端に言われたような気がする。ノートを引っ張り出して、計算して出したら、遅すぎる、とか何とか言われて。散々そういう苛め方をされたけど、ほとんど営業をやっていたんですよ。東京や佐野の買い継ぎ屋さんへ行ったり。たまたまその頃、父が身体の調子を壊して、勤めているよりは、自分で始めた方が良かったのか、織物工場をやる、って言い出した。それで、毛織物の工場を桐生で初めて作ったんですよ。桐生は絹織物でしょ、そこへ一番初めに（父が）勤めた大和毛織という工場の毛織物の織機を借り受けた。あとは新しい織機を入れ、5台くらいで工場を始める、という。お前も帰って来い、というので、12月に僕は朝日織物を辞めた。その時、辞めるのなら、替わりを必ずよこせ、というので、運良く高崎に1人、まだ勤めてない同級生がいて、頼み込んだ。「背広の生地はもらうし、随分歓待されたよ。おらぁ助かった。面白かった」と後で言ってたけれど。とにかく、そいつに行ってもらった。桐生に帰ってきた後、25年から29年の7月くらいまで、大和毛織から材料を出してもらって織り、納める、賃機（ちんばた）という仕事をしてた。やってみないと分からないことだが、毛布を作るような糸はものすごく柔らかくて撚りが少ない。綿みたいなもので、すぐに切れる。そういう織物を織るのに大変苦労をして、それでも何とか4年くらいやったのかな。だんだん景気も悪くなってきたのかな、親も賃機なんかそろそろ諦めた方が良かったのか、「お前、好きなことやっていいよ」と言われた。それでやっと、私は絵を描いていたから、先生になるのがいいと。南城先生なんかにも、「こ

けしのアルバイトなんかしながら絵を描くもんじゃないよ。先生なら良いけど」と言われていたから、とにかく先生をしながら絵を描こう、と思って、29年の10月に、その頃の佐波郡（現在の伊勢崎市）豊受村（とようけむら）の中学校に採用された。それが先生になって初めての学校でした。この時も森村さんの紹介ですね。

辻：それは美術の先生で。

有村：美術の先生で行った。免許状を持っていれば教科以外の申請をすると、美術が教えられた。何の免許でもよかった。美術を教えたい、という許可が下りたのかな。僕は、最後は高商（高崎商業高校）へ行ってたでしょ、免許状は美術で商業科の免許状は無かった。商業美術を教えるには、本当は商業科の免許状が必要だった。それと同じで、工業の免許状で美術を教えていた。美術を教えるようになって、武蔵美（武蔵野美術大学）の通信教育で免許状を取り始めた。それから、仮免の先生が随分行っていた群馬大学の夏の講習会にも行った。29年から37年まで、豊受から桐生の昭和中学校へ移って、37年に桐生工業高校へ行くのですが、高校の美術は、武蔵美で取った免許状は全然使えないんですね。要するに、短大で取った免許状は中学までしか使えないでしょ。結局新しく群大に通ったんですよ。たまたま、桐生工業の定時制に1年いて、昼間空いている時に群大に通った。36単位。曲がりなりにも、絵を描いていたから、磯部勘次（1912-1991）さんとか、「作品だけはきちんと出してくれよ」と、そういう対応は助かったのだけど。同級生の狩野（守）さんは、うるさかった。「とにかく授業出てこなければ駄目だ」と。

染谷：群大に1年通われた。

有村：1年です。1年で36単位。小川参二（1909-2013）さんの高等図学というのがあって、これが面倒だった。こっちはもともと工専の卒業生だから、図学なんていうのは出来て良いはずなんだけど、そういう授業はなかったし、それにやっぱり面倒くさいですね。学生はテーブルに5、6人集まって、授業受けて、試験の時もそこで受けているんですよ。こっちは1人でしょ、教えようと思えばいくらでも教えられる。（一同笑）。小川参二さん、今でも元気ですらっしゃるそうです。百何歳とかいって。その先生に、「分からない。先生本当はどうなんですか」って言うと、「うん、じゃあ、このノートを持って行け」って、教えてくれるんですよ（笑）。あとは、しょうがないから高等図学の本を1冊買って勉強したりして。あれだけが、ちょっと試験が大変だったな。

染谷：それが何年の頃ですか、群大に行ったのは。

有村：37年。37年から38年でしょうね。

住友：休憩入れましょう。大体2時間お話しして、昭和30年超えたくらい。

染谷：前に遡って、自由美術の話聞かせてもらいたいです。

住友：有村先生、記憶力ほんといいですね。あまり年とかスラスラ出てこないでしょう。名前とかもそうですけれどね。

有村：いやいや、そんなことはないですよ。

有村真鐵オーラル・ヒストリー 2013年1月9日

前橋市幸塚町、有村真鐵自宅にて
インタビュアー：染谷滋、辻瑞生
書き起こし：宮谷奈津子

染谷：今日はこの間の続きですが、作品の話からちょっとさせて頂けたら、と思っているのですが、作品のアルバムをお持ちでしたよね。

有村：途中からなんですけどね。

染谷：最初は抽象だったとお伺いしましたが。オノサトさん……。その頃の作品は、もう残ってないですか。

有村：この前、大川美術館で、オノサトと周辺展（「第25回移動大川美術館展—オノサト・トシノブとその周辺」桐生市市民文化会館、2012年11月15日-18日）っていうのかな、オノサトさんの所へ当時行っていた若い人たちの作品があれば借りたい、っていうので、それで4、5人出したんですよ。そこへ、古いのを。

染谷：大川美術館のオノサト展に、ですか。

有村：大川は階段が多いから、街の中でサービスで展覧会をやるんですね、移動展。市民文化会館の展示。あまり、宣伝しないんですね。4日間ばかりしました。そこへ2点（《脱走者》1957年、《番人》1957年頃）ばかり古いのを出したんですよ。

染谷：それは、ちょうどオノサトさんに教わっていた頃のですか。

有村：ちょうどその頃ですね。終わったから、当然（作品が）返ってくるのですが、1月中には返せると思っています、というので、まだ返って来てないのです。

染谷：その頃の抽象作品も残っているのですね。

有村：残っていますね。（群馬）県展で第3回（1952年）と5回（1954年）だったかな、賞をもらったんですが、それがまだ、やや抽象の作品です。

染谷：第3回県展というと、タイトルしか分かってないのですが、《1952+X》。これが抽象作品なんですね。

有村：まあ、具象的な面もありますけどね。で、その作品は行方不明なんですよ。他人が持っていたので。南城さんがばかに気に入ってね。うんと褒めていたんですよ。それを聞いていた南城さんの絵を買っていた人が、「まだお前のところにあるか」と電話掛けてよこして、「あつたら、俺によこせ」ってね。彼にやったんですよ。そうしたら、5、6年前に亡くなって、亡くなったという連絡が無かったから知らないでいて、息子さんに聞けば分かるかな、と思いながらそのままになっている。その時、その家に南城一夫の絵が1枚、僕の《1952+X》という作品が置いてあったんですよ、応接間に。（彼は、）「南城さんのは俺の葬式代に置いてあるんだよ」と言っていたんですよ。

染谷：じゃあ、まだ前橋に残っている可能性も。

有村：いや、桐生です。

染谷：これ（《1952 + X》）は、美術協会賞を獲った、と記録ではありますが。初出品で美術協会賞ですね。

有村：そう。中沢清が最高賞だったんですね。詩人の中沢清、切れる奴でしたね。で、その後の作品は覚えが無いんですよ。僕が。だから、大した絵じゃないんですよ。

染谷：4回展（1953年）が《想い》というタイトルです。

有村：4回展じゃなくて、5回展でしょう。

染谷：5回展が《河原の歌》というタイトルで、教育委員会賞をもらっています。

有村：ああ、そうそう。賞は（3回と5回の）2回しかもらっていないと思うんですね。

染谷：この《河原の歌》も抽象だった、ということですか。

有村：ええ、そうですね。

辻：いつ頃から、抽象から具象へ。

有村：抽象から具象へ変わったのは、先生になってからですから。昭和29年の10月に中学の先生になるんだけど、それから暫くは抽象を描いてましたね。具体的に変わっていくのは、前に言ったことがあった、ベン・シャーン（Ben Shahn 1898-1969）の伝記を読んで。「32歳になって、俺は大工の息子だ」という文章を読んで。「たしかに庶民に訴えかけるような絵が描きたい」と言ったのは、非常に胸に突き刺さって、よし、て思って。

染谷：ベン・シャーンの本を読んだきっかけは何かあったのですか。

有村：きっかけというよりは、たまたま先生をやっていて、松本俊介（1912-1948）と同じ脳脊髄膜炎というのをやったんですよ。結核性の疑い、というので、退職したんですね。

辻：それは、いつ頃のことですか。

有村：36年頃かな。大学で講義するので書いたという『ある絵の伝記』の末尾にあった、後記の方に書いてあったのかな。「32歳になってこうだ」というのが。それから画集を見たりした。その前に中学の教科書が何かにありましたからね、ベン・シャーンのは。それを読んでから。昭和35年が勤評闘争の最高潮だったのかな。「戦争への一里塚」、「軍靴の足音が聞こえてくる」と、言われた頃ですよ。1960年代か。安保闘争の頃。

染谷：「軍靴の足音が聞こえてくる」というのは、スローガンみたいに言われていたことなんですか。

有村：うーん、ある意味では。新聞や雑誌に書いてあったりしたのかな。

染谷：それは安保の絡みでですか。

有村：具体的には、勤評は「戦争への一里塚」という。

染谷：勤評闘争自体が「戦争への一里塚」と言われていたんですね。

有村：そう。そこから何か出来ないかな、描けないかな、と思っていて。

染谷：それで軍靴のシリーズが始まるんですか。

有村：37年に桐工（桐生工業高校）に行ったのですが、それからです〈軍靴〉を描きだしたのは。その前は、それも桐工の時かな、〈高校生〉というので、ちょっとグレたような生意気な、ストリップ劇場の前でうろろしているような高校生みたいなのを描いたりした。その時に、電信柱に勤評の紙が貼ってあるような、ちょっと風刺的な絵を描いた。県展で、その時は50号だったのかな、文部大臣賞の候補になったけれども、「描かれてある標語が、あれはちょっと教育委員会主催の展覧会にふさわしくない」とかなんとかで、文部大臣賞から外れたよ、と言われたことがありましたね。

中学校はそんなに長くはない、7年いたのかな。29年10月から。37年の4月には桐工行ったから。1年だけ定時制に行って、38年の4月からは全日制に移ったんですが。その頃、相当ひどくなってきつつあるんだけど、高校っていうのは、随分まだ楽だったんですよ。

染谷：中学よりも高校の方が楽だった。

有村：楽だった、仕事が。授業時間数が少ないでしょ。自分の部屋があるでしょ。中学の時も準備室はありましたけども小さいですからね。だから、割合に描けたのは桐工に行ってからですね。中学時代は、美術教育に現を抜かして、熱中していたから。

染谷：（県展）第9回展（1958年）の《ひでえやつ》というのは、中学時代ですね。まだ大分抽象ですね。

有村：勤評闘争の頃ですね。赤いんですよ。

染谷：赤い作品なんですか。何か具体的に物は描かれているのですか。

有村：ギターを弾いているようなところがあったりするんだけど、……何かちょっと覚えてないな（笑）。（作品アルバムを見ながら、）これはもう桐工行ってからですね。

染谷：〈軍靴〉シリーズですね。

有村：自衛隊と軍靴みたいな組み合わせで。

染谷：軍靴を最初に描いたっていうのは、いつなんですか。この辺がそうなんですか。

有村：これが割合初めの頃。一番初めに描いたのは、1足だけ描いたんですよ。オノサトさんという人は、描

きたいものだけ描け、余計なものは描くな、って。この頃にも、オノサトさんの家には行って絵を見てもらっているんですね。軍靴だから、俺の好きなものじゃないや、というのではなく、ちゃんと絵として見てくれた。これなんか、オノサトさんがそのまま言ったように描いた感じだったな。「新聞紙の上に、お前、靴 1 足描いたって絵になるんだよ。」と。これは、新聞をちょっと破いたけども。そういう風な教え方でオノサトさんが言うものだから、軍靴だけずっと描いてましたね。

染谷：そうすると、桐工に行った頃から、靴の、軍靴のシリーズですか。

有村：そうですね。平行して、だんだん原爆の。

染谷：原爆のテーマに繋がりますよね、時計が出てくる。何年ぐらい、靴を、軍靴をテーマに。

有村：どのくらい描いたんでしょうね。大きく分けると 10 年、11 年っていう。結果的に大体そういう期間、軍靴描いたり、時計描いたりしてましたね。これ（《マイホーム》1973 年）なんかは、60 年安保の頃から、「マイホーム」ってという題名で少し批判的に、自分たちだけ閉じこもって外に出てこないっていう意味を込めた。

染谷：これ（《マイホーム》1973 年）は、いわゆる箱シリーズになるわけですね。1973 年の自由美術。

有村：その頃、「なんだお前、洋服だけ描いたって、中身がなけりゃどうしようもないぞ」と仲間と言われて、それで中に人が入ったような、こんな風にだんだん変わっていくんですけどね。だけど、そのままじゃ面白くないから椅子取っちゃえ、とかね。（作品写真を見ながら）この椅子は最初なんですよ。途中、もっと不安定にさせた方が面白いな、と椅子を取っちゃった。で、この時に坂崎乙郎さん（1928-1985）が、「あのシリーズは面白いから、他にああいう絵を描いているのなら個展をやらないか」という葉書をもらったのですよ。それで、実はこういう訳で何枚かあります、と言ったら、じゃあ写真を送って寄せ、と。そしたら、自由美術の友達からは、「坂崎さんは写真なんかで絵は判断しない。本物を見ねえとあの人は、うんと言わねえぞ」って。でも本物を持って東京まで行くのは、容易ではない。写真だけ送ったんですよ。そしたら、すぐ紀伊国屋で個展やらないか、って坂崎さんに言われて、紀伊国屋で個展をやった。これ（《箱》1974 年 群馬県立近代美術館所蔵）は、安井賞展出品したんですよ、自由美術で。あの頃は、安井賞は団体が推薦するか、学芸員の方が推薦するか、評論家が推薦するか、そういう風に推薦された人が出したんですね。それで、これは自由美術で推薦されて出した。

染谷：安井賞展（1975 年）に出したのは、これが最初で最後になるんですか。

有村：これね、2 回目なんです。1 回目は落ちているんです。多分ね、宮本三郎（1905-1974）が生きていて審査員やっていたからだ、という、話があるぐらいね、自由美術の作品はみんな落ちていたんですよ（笑）、その頃は。宮本さんが亡くなってから自由美術が少し通るようになって。3 回目は推薦されたんですけど、50 歳を過ぎていました。52、3 だったかな。何だ自由美術はちゃんと人の年くらい覚えておけ、と思って。

染谷：安井賞候補展の出品は 50（歳）までで。

有村：そう。自由美術に連絡して、私はもう 50 過ぎてますから、と。で、これだけです、安井賞は。

染谷：そうすると、70 年代が箱シリーズになるんですかね。

有村：そうですね、大体そうですね。ロッカー……。

染谷：ロッカーのシリーズも、これも箱なわけですよね。

有村：そうですね。

染谷：時計も比較的早く出てくるんですね。

辻：時計も最初、箱に入っているんですね。

染谷：ほんとですね、箱に入っている時計。

有村：これ(《時計と女》1976年)も『朝日ジャーナル』の表紙になったんですね。靴の時も『朝日ジャーナル』の表紙に1回なって。69年に『朝日ジャーナル』の表紙になったのが最初なんだけど、(資料が)無いんですよ。(写真資料を探しながら)これは、もちろんもっと大きいんですけどね、上にずっと余白があるんですね。これは、名古屋のお医者さんから、「日展を観に行っただけど、感動しなかった。ところが、名古屋で自由美術の地方展を観たら、あなたのこの絵が気に入ったから、譲って欲しい」という連絡があったんです。それで、幾らだ、というから、あの頃、50号で20万位だったかな、よく覚えていませんが。あんまり安いから、そこに並んでいるのをもう1枚欲しい、って。で、50号を2枚その人が買ったんですよ。

染谷：それは、前の年の自由美術に出た作品ですか。これ、5月号ってことは。そうですね、68年の11月ですね。12月か。

有村：たしかその時は、自由美術は「反戦展」というテーマを掲げていたと思うんですよ。僕が2枚出したら、初日に行ったらそのうちの1枚だけが会場に飾ってあった。それでどういう訳か、ちょうど見ている時に井上長三郎(1906-1995)さんがやって来て、「おーい、有村君の絵もう1枚持って来い」と言って、落ちた飾っていなかったもう1枚を並べたんですよ。そのくらい井上さんは、こうした方がいいと思うと強引にそういうことをやる。それで、地方展にも2枚行ったんですね。それで、その人が2枚買ってくれた。「僕は医者なんだけど、こういう激動の時代に、僕は何ひとつすることもしていない。何もすることができない。せめて、あなたの絵を側に置いておきたい」と手紙を寄こした。その頃の絵は、後で分かったんですが、大分絵具が剥げたんです。艶が出るのが嫌いなものだから、何回も塗っているのに、マットに仕上ようとテレピンを使ったんですね、リンシードを使わなかったから。それで、絵が傷んでないか心配で手紙を出した。それで、返事が来ないので、どうしたのかな、と思っていた。新聞に、東京駅かどこかで、伴さんという人が線路に落ちて亡くなった、と書いてある。同一人物かも分かりませんが、気になったので、手紙を出したんです。結局それっきりで返事が来ないんです。

染谷：それでは、作品も伴さんもどうなっているか分からないんですね。これは靴の、〈軍靴〉シリーズの最後の方になるんですね。

有村：そうですね、69年で。70年代の後半がだんだん箱になっていくのかな。女性像が出てきたりして。

染谷：もう1回『朝日ジャーナル』の表紙を飾ったのは、時計と……。

有村：これで、76年の時計ですね、7年後か。

染谷：『朝日ジャーナル』は、当時こういう絵画作品を表紙に使っていたのですか。

有村：ずっと、使っていた。いろんな団体の。ほとんど美術館で見つけたんじゃないですかね。その（誌面の）中味に合わせて選んだのでしょね。だから、井上肇も2回出ましたよ。

染谷：そうですか。割合に自由美術の人はとり上げられてましたか。

有村：割合に出てましたね。また、内容が内容で。

染谷：ああ、記事の内容に何となく連想するような。なるほどね。“本土と沖縄”。箱シリーズというのは、どいうところから思いつくのですか。

有村：これは、マイホームが最初。時代は今の状況を打破したいと若い人を含めて動いているのに、自分の家に閉じこもって外へ出ない行動しない。それでも少し気になって、鏡で外を映してみようよと、箱は家なんです。ロッカーなんかは、マイホームというより少しまた違うんだけど。ここには、ひとつ間違えば棺桶となりかねない、という風にも書いてあるけど。マイホームはシリーズで、ロッカーは勤め先に各自ロッカーを持っている訳で、そういうところから出てきたのかな。

染谷：〈高校生〉シリーズがそれに続くのですか。

有村：ええ。80年代。はじめ教育ママを描いたんだけど。《閉ざされた部屋》（1981年 第32回県展）。自由美術では評判が悪かった（笑）。「なんだ、あの絵は」なんて言われた。これは、学校の管理体制がだんだん厳しくなってきて、普通高校が予備校化してきて、僕は高商（高崎商業高校）だったが、商業高校などは、だんだん専門学校化して行ったんですね。高商なんかでは、簿記1級とか2級とか資格をたくさん取らせた方が良く、と。（資格が）いろいろあった。競争心を煽りたてて、そっちの方へ追いこんで行って。それで服装検査もうるさかったし、スカートの丈や爪にマニキュア、ピアスの穴など、そんなことがうるさくなって。教頭が先生の靴箱を覗いて歩くようになった。誰がいて、誰がいないのか、と。それで僕は2年早く辞めたんですよ。

染谷：最後は高商だったんですか。

有村：ええ。58歳の時だから、62年です。美術関係（の科目）は、僕が辞めてすぐ、どんどん無くなっていきますからね。違う科目に変更されていって。僕が教えていた時は、商業デザインと美術だったけど、商業デザインが無くなって、情報関係の科目に中身が変わっていった。

辻：桐工の後が高商ですか。

有村：ええ。

辻：桐工はどのくらい。

有村：18年。あの頃は、希望を出さない限りはほとんど移動しなかったですね。で、希望を出したら、「お前なんか採るところない」と言われたり、したんだけど（笑）。ちょうど美術館（群馬県立近代美術館）が出

来る頃ですよ、桐工にいた頃は。で、転任希望を出し始めたのは。

染谷：昭和 37 年に桐工に行って、18 年いたから、55 年。1980 年の頃に高商に移る。

有村：「美術館で今募集しているから、美術館行かないか」とかね（笑）。

染谷：高商は何年くらいいたのですか。

有村：8 年です。

辻：そうすると、〈高校生〉シリーズは高商に移ってからですか。

有村：移ってからです。

染谷：大体 10 年くらい、というのは決めていたのですか。結果として、そうなったんですか。

有村：決めちゃあいない。あとで見たら、大体 10 年ぐらいで（テーマが）変わっているんだな、と。

染谷：90 年代に入ると、割にテーマがいろいろですかね。

有村：そうですね。（《闖入者（ちにゅうしゃ）》1990 年の画面上部の旗の）もとは、日の丸なんだけど、日の丸があんまり見えないように、日の丸が闖入者というように描いた絵。こういうものとの関係が無くなっていくような、無関心になっていくような世相だから。今の東日本（大震災）もそうだけど、当時はみんな関心があっても、だんだん薄らいでいってしまうような、そういうものへの問題提起として描きたいという気持ちがあった。

染谷：時計が大分前から登場してますけど、最初から長崎の原爆の柱時計を意識されてですか。

有村：そうですね、長崎の場合は。広島の場合は懐中時計だとか、腕時計がありますけども。柱時計は、広島の場合もあるんだろうけれど、長崎の場合ほどは資料が無かったですね。

染谷：長崎の郷里には随分行かれてるんですか。

有村：ええ、長崎にはよく行きましたね。で、また〈原爆〉シリーズも 90 年代に入って描き始めて。広島も描こうかな、という感じがあって。この間建築家に会った時に聞いたが、浦上の天主堂を保存しておけば、広島原爆ドームよりはもっと長持ちするように出来たのではないかと、言われた。また浦上も描こうかと思った。

染谷：浦上の天主堂も大分残っていたのですか。

有村：写真を見ると、一部残っていたんですよ。煉瓦で出来ていたからうまく保存すればひとつの形になったのでは、と思いますね。

染谷：最近は特にテーマを決めている、という訳ではないのですね。

有村：そうですね。2010年で自由美術は辞めたから、80歳を区切りに。周囲からはもっと、描ける、辞めるな、となかなか許可が下りなかった（笑）。

染谷：辞めたのは。

染谷：自由美術の思い出、といいますか、いろんな作家さんがいらっしまったと思いますが、どういう人が記憶に残ってますか。

有村：やっぱり、井上長三郎が一番記憶に強いですね。あの人は、嫌われてはいたんですかね、ワンマンだから。オノサトさんは井上さんに対しては凄いですよ。

染谷：嫌っていた。

有村：ええ。鶴岡政男（1907-1979）の個展（「鶴岡政男の全貌 戦後洋画の異才」展、群馬県立近代美術館、1979年8月11日-9月24日）やったじゃないですか。近代美術館で。あの時オノサトさんも、もちろん来たし、自由美術の人たちも随分来たんですよ。レセプション・パーティーの時、井上リラさんがいて、長三郎さんは居なかったんですけど「オノサトさん、井上長三郎さんのお嬢さんのリラさんです」と言ったら、「僕はあなたのお父さんが大嫌いだ」と。

染谷：そりゃあ、言われた方も驚いちゃいますね（笑）。

有村：小さな声で言ったのではないんですよ。割と大きな声でね。（オノサトさんの画風が）丸に変わった時に、（井上さんが）「丸で絵なんか出来るか」とかいろいろ言ったらしいですよ。それで、あの頃かな、「もう、あんた来年は50号だね」と、そういう大きさのことまで言ったらしいですよ。まあ、井上さんだけじゃあないだろうけど、やや井上さんが、一番強かったのではないかな。

染谷：それは、小さくしろ、という意味なんですか。

有村：もう大きい絵なんか出さな、50号1枚だ、というようなね。その他、あれもやったのだと思う。会員審査も。僕らの時はずっとやってましたよ、もちろん。みんなスイッチを持たされて、良ければスイッチを押してね、光が点くでしょ、それでABCで作品の審査をするのです。Cは駄目。

染谷：会員でも出品できないんですね。

有村：そうそう、並べない。

染谷：厳しいもんですね。

有村：僕らが会員になってからは、ずっと続いてましたけど、その前はどこまでそういうことをやっていたのか。今は、ボタンを使わないで、口頭で良いとか、悪いとか。ランク付けまではしてないんじゃないかな。オノサトさんの頃は、会員で批評はやってた。今年のは良くないぞ、とか、そういうことはやっていたようですね。

染谷：割に、自由美術は、井上さんのワンマン時代が長かった、ということですね。

有村：長かったですね、だから、井上さんが亡くなってホッとした、という人だって随分いたかもしれないですね。

だからガラッと変わりましたよ。今まで事務局やっていたのだから、どんどん中味が変わりましたから。でも井上長三郎さんが真面目にきちんと見てくれていて、いろんなことをとにかく言ってくれたんですよ。例えば、井上肇（1932-2009）の作品見てね、「最近井上君は、もうちょっと作品が…」と言うから、「マンネリですか」と聞いたら、「マンネリなんていうのは、お互い様だよ。そうじゃないんだよ、最近の絵は元気がないんだよ」と。それはもう井上（肇）さんが病気になってからですよ、多分それを見抜いたんだと思う。

染谷：じゃあ割にしっかり絵をよく見ていた。

有村：絵はよく見ていましたよ。あの人は作品を見てね、これはどこに並べたら一番良いか、これは左だ、右だ、縦だとか横だということまで考えていた。それが早いです。その点はすごい能力を持っていましたよね。あと、同じ年代で西八郎（1929-1979）とか、藤林叡三（1928-1996）とか。今でも付き合っているのは、伊藤朝彦（1928-）っていうのがいるんですけど。西八郎はちょっと早く亡くなりすぎちゃって。西さんは僕よりちょっと年上なんですけど、よく群馬に呼んで絵を見てもらったんです。彼の見方は「この所はいらぬから、40のFじゃなくてPにしろ」とか「もっとこっち切っちゃえ」とかね。そういう批評の仕方なんです。一方、藤林は武蔵野美術大学の教授やってるから。西八郎は絵描きの目を持っていて、藤林の方は教育者として絵を見ていた。「どこがどうだから、どうだ」という批評の仕方。

染谷：西さんの方が直感的なんですね。

有村：東宮不二夫（1926-2013）さんなんかと一緒にいると、「おい、東宮、空はあんなに明るくて、物を置けば相当明るく見えるだろう。空をバックに物を置いたら、こんなに暗く見えるだろう。お前、石描いてるけど、石一遍ぶら下げて空を見てみる」と。そういうことを西さんは言っていました。

染谷：西さんが。

有村：ええ。その辺は具体的で的確なところもあったけど、割と絵描きの目だったんじゃないかな。（描いてるものの）中味については言われなかったし、オノサトさんからも「もう、何描いたっていいよ」と言われたんだけど、やっぱり、なかなかそこから抜け出せない。そのまま終わりそうですね。

染谷：いやいや（笑）。

有村：（わははは、と笑う）

染谷：先生が今まで描いてきた中でこれが一番自信作だ、というのはありますか。

有村：自信作、というのではないけど、（作品写真アルバムをめくる）これを描いてて、「もうこれ以上は描けない」と思ったんですよ。

染谷：ああ、そういう実感があった。

有村：（制作年は）1990年くらい。『明日』（井上光晴著『明日一九四五年八月八日』集英社、1982年）と

いう小説をヒントに描きました。

辻：1992年に《明日》という作品があります。新聞の切り抜きも1992年とありますね。

有村：出来上がって見たら、そうでもないな、と思った。

染谷：あ、描いた時は（笑）。

有村：描いている時は、こりゃあ、良いぞと思った。

染谷：《明日》が80号2点。1992年の自由美術ですね。

有村：この時は、井上長三郎が、「俺の隣に並べろ」って言ったんですよ。井上さんがいた頃、2階の一番入口に割合と、こういう絵を集めたんですよ。さっき言った西八郎とか、藤林叡三とかね。伊藤朝彦なんていうのもいて。「『これ持って行っちゃ駄目だよ、井上さん』と言われても、俺はとうとう下ろさなかったんだ」と、そういう風に井上さんが言っていたと、後で聞いた。何が気に入ったんだか（笑）。

辻：少し作品から離れて、プライベートなことを聞かせて頂きたいのですが、ご結婚はいつになるんですか。

有村：いつ（笑）。

染谷：私も聞かれても覚えてない（笑）。何歳の時でしょうか。

有村：（少し間が空いて）初めての子供が42歳だったかな。（暫く間が空く。奥さんに聞きに行く）
昭和42年じゃなかったかな。

染谷：昭和42年というと、先生は37、8歳です。

有村：えーと。昭和45年ぐらいかな。（注：実際は昭和44年11月にご結婚）

辻：先生は前橋とか、伊勢崎にもちょっとお住まいになっていることがあるんですけど。その頃とか……。

有村：うーん、そうじゃあなくてね、えーと、娘が39……。48年生まれだな、あいつがな……。 （間が空く）

染谷：桐工にいらっしゃる頃で間違いありませんよね。

有村：そうですね。

染谷：昭和39年に主体美術協会（以下、主体）が結成されて、自由美術から大量の退会者が出る、という年がありますが。この時は、もう結婚されてましたかね。

有村：その時はどうだったかな。

染谷：あの時は自由美術は相当大変だったでしょ。

有村：群馬は、ほとんどみんな主体の方に行ったんですよ。残ったのが、東宮と僕と。井上（肇）はその時出してたか、出してないかじゃあないかな。他の人は高崎の人たちがほとんどだから、そりゃあ全部主体に行っちゃったんですね。その時は、美術教育で神戸大学の教授をやっていた、上野省策（1911-1999）が自由美術にいたんですよ。僕らは東京でどういうことが起きているのか、あんまりよく分からない。まあ、上野さんが残っているし、そこから動かなかったんでしょうね。前に、オノサトさんが辞める時も、「僕、自由美術辞めるから、有さんどうする。残るなら残ればいいし、辞めるなら一緒に辞めても良いよ」と言われた時も、「上野省策がいるから、自由美術に残ります」と、残ったんですよ。オノサトさんは辞めて、デモクラート、瑛丸なんかと活動するような団体に所属したり。奥さんもちろん入っていたから、たしかそうだと思いますね。

染谷：さて、そうすると結婚された年は思い出されませんか（笑）。

有村：1970年ぐらいかな。

染谷：そんな先になりますか。1970年というと、先生は41、2歳になられてますけれど。

有村：40ぐらいですよ、僕が。

染谷：比較的、晩婚っていうのも変ですけど、遅かったんですね。

有村：そうですね。

染谷：奥さんは美術の関係で。

有村：家内は群大の美術で。研究会なんかで一緒になったりしてた。自由美術の群馬展にも、ちょっと出していた。

染谷：そうですか。結婚されてからも絵を描かれていた。

有村：えー、ちょっと描きましたけど、やっぱり絵具代が無かった訳じゃあないけど（笑）、やっぱり2人は、どちらか片方は止めますね。

染谷：女の方はお子さんが生まれたりすると。

有村：兄弟4人のうち、3人とも群大の美術なんですよ。家内の方は。男が1人、女が2人なんですが。今は、1人だけ妹が描いてます。僕の教室に来てます。彫刻やっていたのだけど、身体が大変なんで、絵に転向して。（先生を）退職してから僕の所に来たのかな。もう、63、4になるのかな。

染谷：結婚されたことで、制作に変化が出た、ということはないのですか。

有村：そういうことは、あまり無かったですね。ただ、よく絵を描く人だ、という風に思っていたらしいけど。あまり、こっちを見てくれない（笑）。学校へ行っている時は、帰ってきて、夕飯前に描いて、夕飯食べてまた描いて、っていう感じだったでしょ。それが割合に50代までは、やや出来たのかなあ。まあ、土曜日曜は空けてあったけど、やっぱり、描いて。

染谷：じゃあ、あんまり結婚に影響されなかった。

有村：そうですね。ただ、僕が言われたのは、学校を卒業した時と、結婚した時、それを乗り越えられれば何とか絵が描ける、と。

染谷：どなたから。

有村：誰だったかな。やっぱり絵描きだったと思うけれど。一番危ないのは、学校を卒業する時。その次は結婚。それで止めなければなんともつだろうと。そんなものかな、と思った。

染谷：でもまあ、その通りになったわけですね。

有村：まあ、描いていれば、ある程度までは必ず人間っていうのは行くんですね。そういうところはあるみたいだな。

染谷：結婚されてお子さんは、すぐ生まれたんですか。

有村：ええ、2人。41の息子と39の娘です。

染谷：上が男の子でしたよね。娘さんは絵の方に、修復に進まれたのは知っているんですけど。息子さんの方はどうされているんですか。

有村：息子は駄目で（笑）、「お前、絵描きにならないか」って言ったら、「俺は、絵描いているより、写真の方が早くて良いや」って言って、初め写真をやるようなことを言っていたけれど、駄目だったですね。で、オートバイの方に夢中になって、レーサーになるとかで、休みになるとレースに通って。あの、伊勢崎のオートレースみたいなのではなくて、本当のレーサーに憧れていた。

染谷：本当にタイムを競うような。

有村：そうそう。まあ、とにかく金も随分使ったし、怪我也多かったし、それでとうとう自動車屋になっちゃった。車関係の仕事をするようになった。これしか俺の生きる道がない、とか言って。やれるだけ、やれば良いや、と思って。

染谷：娘さんは、自分の絵は描かれているんですか。

有村：模写展みたいな展覧会で、修復をやっている人たちで、グループ展みたいなのをやったりはしている。それは、去年、一昨年くらいにやって、今のところはやってない。

染谷：修復の仕事の方が忙しい。

有村：修復やっている人は、自分で絵も描いているんだけど、みな模写の方が多いです。自分の作品を描く、ということはあまりしてないですね。最初、修復をやりたいというと、自分の絵を描こうと思っているのなら、修復には進むなと言われるようですよ。

染谷：でも、娘さんのデッサンは上手ですよ、歌田（真介）先生の本の挿絵に描かれたのは娘さんかと思いますが。なかなか筆達者な方だから本格的に絵を描かれているのかな、と思いましたが。

有村：いやいや。（群馬）青年美術展に一遍。

染谷：青年美術展に出されているのですか。それは、気が付きませんでした。

有村：それが最初で最後なのかな。裸の男の…方は、落ちたんだ。縦長のやつで、日本画だったんですけどね。人物がいて、どうだっけな。

染谷：日本画やってたんですか。

有村：膠彩画、日本画で出していましたね。油絵もちろん描いてましたけど。日本画は（前橋）市民展に出して、30周年記念大賞というのをもらっている。その授賞式の翌日が、芸大の大学院入試の発表があるので、それで、「入りました」というので、それから大学院へ行った。本当にバタバタと。

辻：修復されるようになってからは、有村先生の作品も修復された、と伺ってます。

有村：大川美術館に出した作品の1枚を修復した。それは、すごく丁寧ですよ。裏に、楔が糸でつけてある。たるまないように、楔を打ち込むようになっていて。裏に貼ってあった題名なんか描いてあったのをきれいに取って、それをきちんと台紙に貼って。

染谷：分かります。なるほど。

有村：それで、あと1枚の絵はオノサトさんが結婚する頃、具象的な絵を何人か同級生を中心に売ったんですね。その時の絵があるはずだ、というので、たまたま僕が桐工へ勤めていた頃社会の先生で野球の顧問をやっていた人がいて、その人がオノサトさんの家のすぐ側で、「この前オノサトが来て、絵を買ってくれ、と持って来たのだが」と。オノサトさんの絵を2枚持っている。1枚は桃を描いた、具象的な絵を持ってきた、と。このことを大川美術館に言われた時に思いだして、「阿部さんの家に絵があるはずですよ」と言ったら、東京にいる阿部さんの息子さんに連絡をした。ちょうど、（群馬の家が）空き家なので、壊す時だった。オノサトさんの絵と一緒に僕の絵も1枚あった。オノサトさんの絵は展覧会に出し、僕の絵は「そのまま参考にしたいから置いていってほしい」と小此木さん（註：小此木美代子 大川美術館学芸員）に言われたとかで、僕は、小此木さんに連絡をもらって、行って（作品を）見たのだが、雨漏りをするような家に20年くらい放置されていて、（家を）壊すから、ということで美術館に持って来た事で、（作品の）状態がどんどん悪くなった。亀裂や絵具の膜が上がってくる。それで、家に持って帰ってきて、これじゃあどうしようもないので、何とか他の絵に変えてもらえないか、と思い、息子さんに電話をした。そしたら、「親父が気に入って、死ぬまで床の間に置いていた絵だから、簡単に取り換えるわけにはいかない」と言うのですよ。（作品を）直すのにどうするかな、と思っていたら、娘が来たから、どうすりゃあいいと聞いたら、「（修復には）40万くらいかかる」と。40万、とんでもない話（笑）。とにかく、少し手を付けていった。その時はまだ、阿部さんの所へ連絡をしないで、何とか取り換えられるだろう、と思っていたのだけど、娘が「お父さん、これじゃあまたバラバラ絵具が落ちるところ落として、また絵具塗っちゃうでしょう」と言って、帰ってきては少しずつ直していたのだけど。阿部さんに連絡をしたら、まあ、「とにかく親父がこれが良い」と。親父の仏間を作って、使っていたものを集めておきたいので、「床の間にあった絵だから戻してくれ」と。弱ったなあ、と、訳を話したら、「そ

んな手間暇掛けたら申し訳ないから、そのまま結構です」と言われた（笑）。作者としては弱ったな、と。

染谷：それはいつ頃の作品なんですか。

有村：桐工へ行って直後ぐらいの。（〈靴〉シリーズの）空に靴が突き刺さってあるような絵で。その空が傷んでしまって駄目なんです。僕としては、靴はそのままだから、取れる絵具全部引っ搔いて取っちゃって、塗りかえれば訳ない。そしたら、修復しなきゃ駄目だ、って娘が。俺が何とかしたいんだけど、って言ったら、絶対駄目だ、と。

染谷：修復家の意地があるでしょうから（笑）。

有村：娘に見せたら、こんなことになるのか、と思った。見せなきゃ良かった（笑）。

染谷：じゃあ、まだそのままになっているんですか。

有村：そのままです。娘が帰ってきては2、3回手を入れただけです。

染谷：途中まで直してはあるけど、相当時間かかりそうですね。

有村：だから、阿部さんには、「そういう訳だから時間だけは下さい」って言うておいたんですよ。もう仕様がなから。本当に取り換えられるものなら、取り換えたいですよ。

染谷：いや、よく分かります（笑）。

有村：許可してもらえなかった。子供にしてみれば、たしかに親父さんの物をそのまま残しておきたい、という気持ちは分かりますよ。

染谷：その阿部さんって方は絵をたくさん集めていらっやっったんですか。

有村：桐生に芭蕉（飲食店）っていうのがあるでしょ。あの人の親戚なんです。割合、絵とかそういうものに興味があった。もともとは、歯医者さんの息子さんなのかな。お兄さんは歯医者さんをやっていたから。その人はずっと野球の顧問で、全国の高野連の役職もやったような人なんです。割合に裕福だったのかな。僕の前にはいた美術の先生の絵もありましたね。オノサトさんの絵は2枚あって、丸になってからの絵、桃の絵があって、結構ありましたね。

染谷：前橋に越されたのは、いつ頃なんですか。ここに来て何年くらいですか。

有村：ここはね、30年くらいです。81、2年の頃かな。

染谷：その前は。

有村：広瀬にいたんですよ。岩崎（岩崎孝）先生のすぐ隣です。

染谷：広瀬は長かったんですか。

有村：広瀬は10年ぐらいかな。たまたま教員組合の事務局行ったら、あそこへ労金の住宅が出来るから、よかったらどうですか、と言われて。それで僕は、岩崎にその話をしたんですよ。で、岩崎も「そりゃあ良いや」と。で、僕が申し込んで、その後岩崎が申し込んで。という風な感じで。だから、2軒隣同士。

辻：その前、西善というのは。

有村：西善というのが広瀬町3丁目に改名になったんですね。最初西善町で、その後、広瀬団地として、朝倉からずっと繋がってきた。

染谷：じゃあ広瀬に行く前は伊勢崎ですか。

有村：えーと、そうですね。

染谷：それは借家ですか。

有村：借家ですね。

染谷：ここ、幸塚というと、昔南城さんもお住まいだったのもこの辺でしょ。

有村：そうです。川の側です。大正橋というのがあって、公民館のところから来ると、右へ入って、川沿いでですね。そこに清水さんというお家があって、その清水さんの家の離れみたいな感じなのかな。1軒あって、6畳2間だった気がするなあ。南城さんというのは、神経質な人で、僕たちが行くというのが分かったら、絵を全部押し入れに片づけちゃう。奥さんは長煙管で火鉢の所で煙草吸っている。それで、とにかくひとつも描いてある絵がない、という感じだったんですね。そんなに何回も行かなかったんですけど、桐生にいた笠木実さんと一緒に、2人で行ったのか、何人で行ったのか。

染谷：清心幼稚園に通っていた頃の話ですね。

有村：そうそう。

染谷：南城さんの奥さんって、煙管ですか。珍しいですね（笑）。

有村：ええ、これが本当に南城さんの奥さんか、という感じだったですよ。フランス帰り。フランスで結婚してるでしょ。岡さんと張り合った、という話もあるぐらいですよ。

染谷：ええ、私もそんな（話を聞いています）。もともと岡鹿之助さんのアレだった。

有村：粋な感じも……。面白いねえ。

染谷：奥さんって東京の人なんですか。

有村：それもよく分からない。

染谷：奥さんの事情がよく分からなくて（笑）。

有村：向こうで一緒になった、というから、へえ、と思ったんだけど。

染谷：でも、安中に親戚がいたみたいですよ。最後南城さんが行ったのは、奥さんの方の親戚、とたしかそう聞いたような気がするんですよ。ああ、安中の人なのかな、と思ったんですよ。なかなか素性を知っている方がいらっしやらないので、どういう人なんだろうと思って。

有村：そうですね、南城さんは前橋の人で、お母さんがどこか呉服屋さんか洋服屋さんか。

染谷：南城洋服店ですよ。そうですね、では本当に近くにいたんですね。

有村：すぐ近くなんです。橋を渡ったところの左側に奈良商店という店があり、川沿いのところで牛を何頭か飼っていて、その奥さんが子供の頃、牛乳をよく南城さんの家へ届けた、と言ってましたね。で、みんな南城さんのことを知っている人がいなくなって、その子供の頃牛乳を持って行ったという人は、まだ、65歳くらいかな。その人くらいかな、よく知っているのは。それで、南城さんがウサギを飼っていて、ウサギの絵あるでしょ。

辻：幾つかウサギをモチーフにされてますよね。

有村：そう。ウサギをよく写生していたから、描いているのを見た人が、「私に絵をくれないか」って言ったら、「やるようなものじゃねえ」などと言われ怒られたとか（笑）。その後は、馬場川ですよ。日当たりの悪い、前の（国道）50号線に家があって、その裏でしょ。

染谷：良い場所ではないから、全然売れてない（笑）。まあ、街中が良かったんですかね。

有村：街中が良かったのか、ここはどうだったのかな。

染谷：田舎嫌いだから。

有村：清水さんの家は子供1人かな、今その人は出ちゃってる。奥さんが残っている。

染谷：今でも、その清水さんのお宅はあるのですか。

有村：あるんです。で、その奥さんは、ちょうどお嫁に来た頃に南城さんがいた、っていうのかな。あんまり南城さんのことを知らないみたいですね。

染谷：別棟の一軒屋みたいな所へいたの。

有村：ええ。大きな家があって、別棟の一軒。それを壊して息子の家というので作ったのだけど、息子はそこへ住まない。多分息子の家を建てたあたりにあったんですかね。何に使っていたのかよく分からない。貸家として作ったのか、何で作ったのかよく分からない。旧家で大きな家ですよ。

染谷：今、先生制作は時間を決めているのですか、朝とか昼とか。

有村：いや、あんまり決めてなくて、大体今は午後が多いかな。午前中は中途半端になっちゃうと上手く行かない。午後になってからやるような感じかな。

染谷：まあ、朝方っていうのはまとまった時間が出来ないから。

有村：午後から夕飯にかけて、ということの方が多いですね。

染谷：もう夜なんかは全く描かれない。

有村：描かないですね。

染谷：以前は描かれていた。

有村：前は描きましたけども。今はもう描かないですね。

染谷：前橋の市民展というのは、最初から関わっていたのですか。

有村：僕は、途中から前橋へ来たから。何回展だろう、それでも割と早い方じゃないかな。前橋市民展が開かれて、2年か3年経った頃ですよ。

辻：今年が47回展。

有村：3回展か4回展の頃からだろうと思いますね。

染谷：先生が出すようになった頃というのは、審査員はどういう方が。

有村：あの頃は、川隅路之助がいましたね。二紀会の近藤嘉男（1915-1979）、その2人が一番年配だったかな。あとは二科会の久保繁造さん（1911-2006）、清水（刀根）さん（1905-1984）はいなかった気がするんだよな。狩野（守）さんは参加していなかった。あとは岩崎義治、渋谷光典（1921-）なんかがいたのかなあ。あとは自由美術の東宮不二夫がいて、もうずっと若くなる。岩崎さんなんかは今生きていれば90歳をちょっと過ぎたぐらいか。東宮が今86歳。渋谷光典、岩崎義治、東宮なんかかな。田中恒（1927-2009）とか、ああいう人たちがいて、日本画には塩原友子（1921-）が。塩原達次郎（1919-2010）っていう方もいたな。

染谷：ご親戚なんですか。

有村：いやいや、全然関係ないですね。

染谷：県展と市民展というのは、どんな風に関わっているのですか。特に関係ないんですか。

有村：市民展と県展というのは、あんまり関係ない、と言えば関係ないかな。ただ、県展で会員になっているのに、市民展では会員になってないのは、おかしいじゃないか、とか、そういうことを問題にすることはありますね。市民展は連盟展も入っているでしょ。始める時に、連盟の人の待遇どうするか、県展の人と同じにし

ていいのか、どうしようか、っていうのはあったみたい。

染谷：ああ、そういう調整はあったんですね。

有村：結局は、連盟の方が会員なら、やっぱり会員にしたんでしょう。差をつけるわけにはいかないの。

染谷：前橋市民展って、誰が言い出して、誰が始めたのですか（笑）。

有村：これは、市でしょ。全部、美術会が出来ているわけではないですよ。市がやりましょう、ということで始めたのです。

染谷：ああ、なるほど。市の職員の声かけ、社会教育課か何かがかきと声掛けて始めたんですね。今どこが関わっているの。

辻：今は、教育委員会の生涯学習課が担当です。

有村：そのうちには、前橋市美術協会みたいな団体が出来るとはならないかな。だって、行政の方はその方が楽ですよ。

染谷：まあ、楽ですよ。行政が直接やっているのは敵わないですよ。

有村：行政でやればその人たちがやらなきゃならない。美術館で関わると、誰がそれを担当するのか、とかね。美術館はどこまでそれにタッチするのか、とかね。

染谷：それは、県展の時にそうでしたから（笑）。

有村：黒田さん（註：黒田亮子 元群馬県立館林美術館長）が盛んに、「もう私たちは」というので、一軒ずつ回って来たんですよ。

染谷：あ、そうだったんですか。説得というか。

有村：「こういう状態なんだけど、私たちこうです」って。その後、なかなか話が出来なかったけど。前橋市美術協会みたいなのを作って、会費幾らとして、やるようになれば、その方が財政的に市だって楽ですよ。職員を動員する必要ないでしょ。

辻：自主的な活動になって行ったら本当は良いですよ。

有村：生涯学習課だけが関わらないで、今度は美術館が関わるようなかたちにはなるだろうけど。どこまで、それに关わるの、というのもあるだろうしね。県展の場合だって、ほとんどね。

染谷：そうですね、県はほとんどタッチしてない。会長の調整ぐらいで。

有村：田中さん（註：田中龍也 群馬県立近代美術館学芸員）が真面目に照明を全部当てて歩いたり。そういうことはするけど（笑）。

染谷：先生、美術にこれまでずっと関わってきて、美術をやってきたことの感想、思いみたいなのがありますか。

有村：やっぱり、自分の足跡を残すっていうか、自分が生きてきた証みたいなのを描き続けてこられた、描き続けることによって残せるみたいな、残したってしょうがないんだけど、自分ではある意味満足かな。描くことで自分を見つめるということがありますから。他の仕事と比べると、そういう満足感みたいなのはありませんよね。

染谷：画集を作るような計画は無いのですか。

有村：今のところは考えてない。面倒くさくて（笑）。

染谷：これからの抱負とかございますか。

有村：もうこれからの、抱負はないですね。

染谷：ないですか、もう（笑）。今あちこちで教えてらっしゃる。

有村：あちこちというか、桂萱の公民館で。

染谷：これはもう随分昔からですか。

有村：20年くらいやっていますかね。

染谷：何人くらい教えているのですか。

有村：今ちょっと少なくなって、18くらいかな。

染谷：多い時はどのくらいいたのですか。

有村：23、4でしたかね。みんな高齢になってからね、心臓がどうだとか、梯子から落ちて怪我をした、だとか（笑）。いろいろそういうので、通えなくて、来られない、という人もいますね。

染谷：週一遍くらい教えているのですか。

有村：週に一遍ですね。で、あと芳賀の公民館、これが引っ掛かりがあって。これは増えない。固定していて、6人くらいかな今。

染谷：これは何年かやっているのですか。

有村：これは、途中から。

染谷：誰かのあとを継いだの。

有村：公民館が、公民館活動を活発にさせるために、そういうことを計画するんですね。それで今年の夏の何日から何日まで、絵画教室をやるから参加しませんか、と呼びかけて。

染谷：集中講義みたいな感じ。

有村：夏季講習みたいなので、やって。それが終わると、自主的に自分たちでクラブを作って、そのまま先生に残ってもらうけどどうですか、と。そういうかたちで。みんな、桂萱もそう。

染谷：そういう作り方をするんですね。最初は仕掛けておいて。

有村：先生が公民館に行って、「絵画教室やりたいんだけど、生徒を集めて」なんていうのではない。そういうかたちで大体残っているのではないですか。

染谷：あとは生徒たちが自主的にお金を出し合って、先生を呼んだり、会場確保したりするわけですね。なるほどね、上手いシステムですね。

有村：1回幾らぐらいなら宜しいでしょうか、みたいなこと、公民館でそこまで決めてる。

辻：じゃあ、今は2か所で週に2回。

有村：芳賀団地は人数少ないから、1カ月に2回だけ。

染谷：以前はもっと他にもやっていたのですか。

有村：いやあ、それはやってないです。桂萱の公民館は田村さんがやっていた所なんですよ。田村清男さん。あの人が水彩画教室をやっていた。その田村さんが亡くなって、その後誰かに来てもらいたい、というので、たまたま私が桂萱地区だから、呼ばれて行ったようなかたちですね。

染谷：じゃあ、今でも水彩画が主なんですか。

有村：主ではなくなりましたね。始め、水彩画クラブかなんかだったんですよ。だから、これを絵画クラブにしてくれ、と。油絵が今半分以上かな、水彩画の方が少ないかもしれない。だけど、水彩画の人は長いです。30年ぐらい。

染谷：今でも県展に。あ、これきっと先生の教え子だな、というの方が（笑）。

有村：会員になったり、準会員になったり。描き始めて努力する人は必ず良くなりますね。

染谷：そんなところですかね。

辻：そうですね。

染谷：じゃあ一応こんなところで、時間も来ましたので。本当に長時間ありがとうございました。

この冊子は2020年3月31日現在、日本美術オーラル・
ヒストリー・アーカイヴのウェブサイトで公開されている
有村真鐵オーラル・ヒストリーを印刷したものです。インタビューをより
正確なものにするために、修正あるいは追記される可能性があります。
最新のバージョンはウェブサイト (www.oralarthistory.org) をご
確認ください。

This booklet prints the oral history interview with Arimura
Shintetsu published on the website of the Oral History
Archives of Japanese Art as of March 31, 2020. The interview
can be revised or annotated for the purpose of accuracy. For
the latest version, please visit our website at www.oralhistory.org.

有村真鐵オーラル・ヒストリー

インタビュアー：染谷滋、辻瑞生、住友文彦

デザイン：西岡勉（フォルダ）、青木意芽滋（冊子）

組版：若林亮二

校正：森かおる、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ

発行：日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ

発行日：2020年3月31日

Oral History Interview with Arimura Shintetsu

Interviewers: Someya Shigeru, Tsuji Mizuki and Sumitomo Fumihiko

Design: Nishioka Tsutomu (folder) and Aoki Imoji (booklet)

Typesetting: Wakabayashi Ryōji

Proofreading: Mori Kaoru and Oral History Archives of Japanese Art

Published by: Oral History Archives of Japanese Art